未来を拓く実践力を育む家庭科教育
～学びの質を高める問題解決的な学習を通して～

香川県中学校技術・家庭科研究会
研究委員会

１　はじめに

現在グローバル化の下、産業競争がますます激化する中で、少子高齢化やデジタル化といった急激な社会変化に対応することが求められている。その対応として、すべての人々にとって便利で豊かな暮らしを目指す Society5.0 が提唱されている。この実現に向けて、いかにデジタル技術やAI（人工知能）が進化しようとも、「人間にしかできない強み」を発揮するために、すべての子ども達に読解力や対話力、科学的に思考・吟味し活用する力、価値を見つけ生み出す感性や好奇心・探究力、創造性などを身に付けることが求められている。

一方で、人が手を動かす行為が減り、最先端のテクノロジーが生活の多くの部分を代替してくれる時代において、なぜ学校で家庭科を学ぶ必要があるのかといった意義を問う子ども達が増えることも予想される。しかし、便利すぎる時代だからこそ家庭科で生活の根本にある概念を理解し、基礎を身に付けることが、これからの予測困難な時代を生き抜く武器になるのではないだろうか。生活の根本にある概念を理解していれば、デジタルツールや AI が提示する案を自分の生活に合わせてアレンジし最適化できる。また、機械的な提案の中に潜む課題に気付き、自ら修正することも可能である。これからの子ども達に必要なのは、便利なツールの操作習得にとどまることではなく、生活の根本にある概念を理解して、テクノロジーを主体的に使いこなし、どのように環境が変わっても生活を豊かにできる土台を自らデザインする力であると考える。

このような社会で自ら舵をとり、より豊かな生活を追求していくためにも、これからの家庭科教育では、家庭科の見方・考え方を働かせ、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造する資質・能力を育むことが重要である。そして、この資質・能力を育むためには、生活の自立に向けて課題を解決するための問題解決的な学習をより一層充実させる必要があると考えている。

２　主題設定の理由

香川県ではこれまで、よりよい生活を工夫し創造するためには問題解決能力の育成が欠かせないと考え、問題解決的な学習を軸に研究を進めてきた。平成 30 年には、「社会の変化に対応し、よりよい生活を創造する技術・家庭科教育」を研究主題として中四国大会を開催し、大会以降も研鑽を積み重ねており、これまでの研究のまとめとして令和７年度に教員・生徒にアンケートを実施した。

教員アンケートからは、生徒の周りにはものがあふれ、欲しいものはすぐに手に入り、不便と感じる機会が少ないことや、生活体験が減少しているため、従来のような学習の流れでは、生活の課題に気付きにくくなっているのではないかという指摘があった。そのため、生徒が自分の生活を振り返り、多様な視点から生活を見つめることで問題に気づき、課題を設定することができるような授業改善の必要があるといえる。

また、生徒アンケートの結果（**図１**）によると、約８割の生徒が「授業内容は日常の生活や社会と深く関わっている」と肯定的に捉えていることが明らかになった。一方で、学習内容の概念的理解を測る「その関わりを他者に説明できるか」という問いに対しては、肯定的な回答が約５割にとどまっており、生徒は知識として「知っている」状態にはあるものの、それを他者に説明できるほどの「深い理解」には至っていないという課題が浮き彫りになった。さらに、「生活をしていて困るこ

とや不便だと感じることがある」と答えた生徒も５割程度であり、「授業で学んだ知識や技能を実際に家庭や学校生活の中で試してみた」という生徒は６割にとどまっている。

これらの結果から、生徒が家庭科の重要性を頭では理解しつつも、「なぜその解決策が必要なのかという根拠の説明」や「主体的に生活を改善・創造する実践」にまでは十分に結びついていないことが明らかとなった。したがって、生徒が問題を「自分事」として捉え、自ら選択・決定しながら解決へ向かい、自らの変容を実感できる授業展開への工夫・改善が必要であると考える。

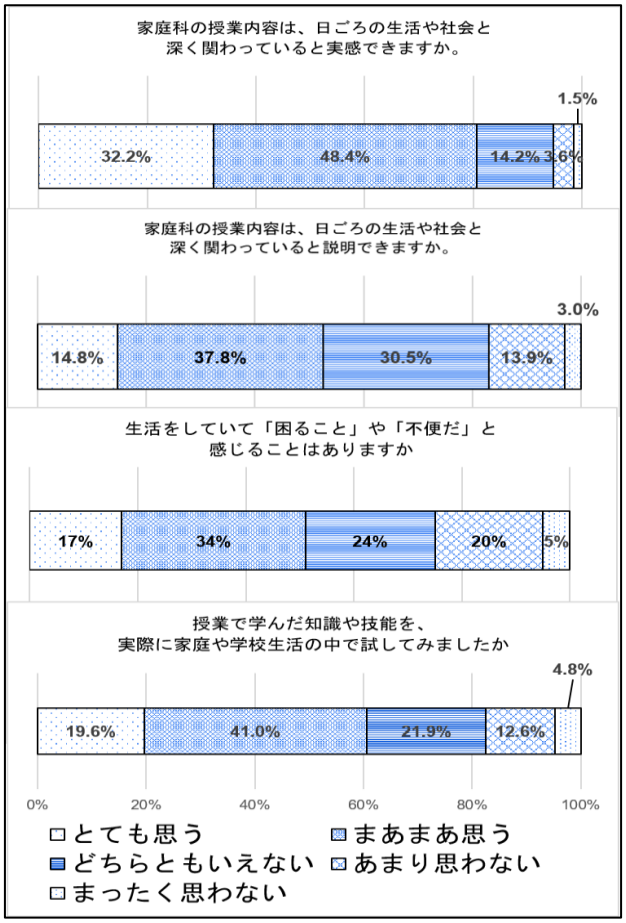


図１　生徒アンケート（R7 実施. 県内中学校 8,661 名）

本来、家庭科は、生活そのものを学習対象とし、その生活を「なぜ」、「どうして」と問い直す教科である。当たり前の生活を問い直し、生活行為の意味や根拠に気づき、新しい発見を生み出すことで、生活の課題が発見できる。その課題を発見し、問いをもって学習に向かうことで、生徒の思考の流れに沿った授業が展開できるとともに、本教科を学ぶ意味が実感でき、学びを生活に生かそうとする意識が高まり、生活を工夫し創造しようとする態度が育つのではないだろうか。

したがって、研究を進めるためには、社会の変化や生徒の実態、及び学習指導要領の趣旨を踏まえながら、これまでの研究成果を生かした問題解決的な学習をさらに工夫・改善していく必要があると考えた。

以上のことから、問題解決能力や、工夫し創造しようとする態度を身に付け、よりよい社会を創造していくために、研究主題を「未来を拓く実践力を育む家庭科教育」、副題を「学びの質を高める問題解決的な学習を通して」と設定し、研究に取り組むこととした。

３　目指す生徒像

研究主題に示した「未来を拓く実践力を身に付けた生徒像」を以下のように設定した。

○家族・家庭生活、衣食住、生活の経営と消費生活に関する基礎的な理解を深め、生活を支える確かな技能を身に付けた生徒
○生活や家族・地域の現状から問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、表現するなど、課題を解決する力を身に付けた生徒
○自らの生活が家族や地域、環境に影響を与えていることに気づき、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造しようとする実践的な態度を身に付けた生徒

４　研究仮説

本研究では、「生活を工夫し創造する資質・能力」を育成するためには、「学びの質を高める」ことが重要であると考えた。ここでいう「学びの質を高める」とは、授業で学んだことが生活や社会の中に生かされることである。

そのためには、まず生徒が学習に対する興味・関心をもち、主体的に学ぼうとする姿勢が不可欠である。そして生徒自身が生活や社会の中から問題を見つけ、課題を設定し、その解決を図る過程で多様な視点からものごとを捉えて考え、課題を解決する力を身に付けることが重要である。また、

自分の学びを振り返り、次の学びにつなげようとすることも求められる。さらに生徒自身が自分の学びが深まっていることを自覚できることも大切である。このような学習を繰り返し行うことで「学びの質を高める」ことができると考えた。

そこで、本研究では、学びの質を高めることで、生活を工夫し創造する資質・能力を育成することを目指して、以下のような仮説を立てた。

> ３年間を見通した年間指導計画を軸として、主体的に取り組む問題解決的な学習を工夫・改善すれば、学びの質が高まり、生活を工夫し創造しようとする実践力が育つであろう。

５　研究内容

(1)　３年間を見通した指導計画の作成

学びの質を高めるためには、小・中・高を通じた学習内容の系統性を図りながら発達の段階に応じ、家庭科の見方・考え方を働かせながら問題解決的な学習を繰り返し行い、資質・能力を段階的に育むことが重要である。

また、限られた授業時数の中で学びの質を高めるため、育む資質・能力を明確にし、各項目の事項について有機的な関連を図り、学びの連続性と系統性を図った年間計画を作成する（**図２**）。

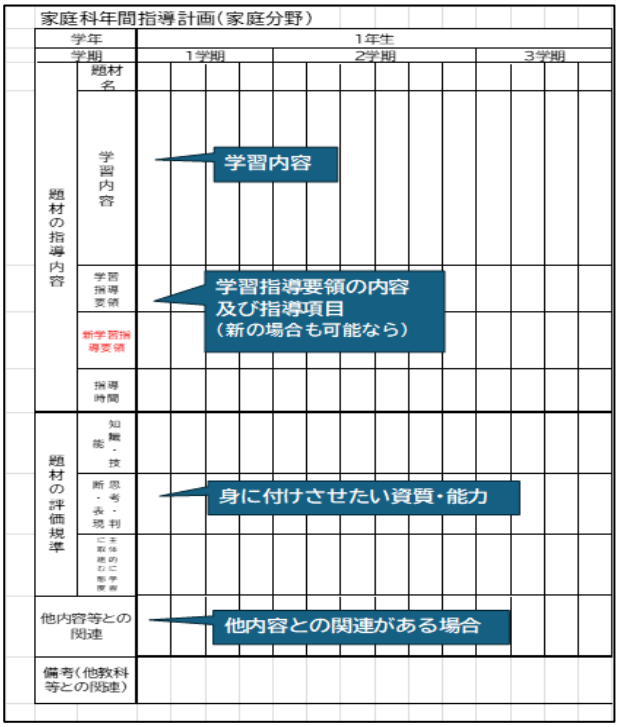


図２　年間指導計画

(2)　問題解決的な学習の展開の工夫

①　学びがいのある課題設定の工夫

知的好奇心が旺盛な幼児期は、身近なものに対して「なぜ」「どうして」と問い、様々なことに対して知りたい欲求があった。そして、それを確かめるために行動し、自分の疑問を追求してきた経験がある。そこに思考回路が生まれ、学びが定着したのである。つまり、主体的に学ぶには、生徒が学習に対する必然性を認識し、自ら「問い」をもっているかが重要だと考える。

また、個々の家庭によって営まれている生活には、様々な課題が存在しており、その課題は生徒に内在している。そのため生徒が自分の生活を問い直し、自分にとって価値のある「問い」を見いだす必要がある。価値ある「問い」とは、他の誰のものでもない自分にとってのリアルな課題である。教師が課題を一方的に設定し、解決方法を提示するような問題解決的な学習では、学びの質は高まらない。

そのため、生徒の知的好奇心を喚起するような課題を生徒と共に生み出したり、生徒の「解決してみたい」という思いを引き出したり、授業での学びを通して、「こんな自分になっていたい」というゴールイメージがもてたり、「自分でもやってみよう」と思えたりするような、生徒にとって学びがいのある課題を設定することが重要であると考える。

> 【学びがいのある課題設定の例】
> ・実生活における生徒の疑問から課題を設定する
> ・前時の振り返りなどでみられた生徒のつぶやきから課題を設定する
> ・少し難しそうだけど「学習したことを活用したらできそう」と感じられるような課題を設定する
> ・日々繰り返される生活の何気ない場面に焦点をあてたり、これまでの生活経験や既有知識とのずれを生じさせたりするなど、生徒の「当たり前」を揺さぶり、問いを引き出すことで課題を設定する
> ・学習のゴールイメージを共有して課題を設定する　など

②　多様な自己選択・自己決定の場の工夫

課題の解決方法の検討や計画、実践的・体験的な活動や交流活動などの学習形態などにおいて、生徒が自ら考え、多様な自己選択・自己決定や自己調整を行いながら、実践活動を行えるような場

面を工夫する。また、その際にはデジタル学習機器などを、実践活動の分析や情報収集のための効果的な学習基盤として位置付け、生徒が活用しやすい学習環境を整えることも必要であると考えている。

【学習の中で生徒が選択できる場面の例】
・解決したい課題の選択
　自分の興味・関心や生活状況、技能レベルに合わせた作品製作や、解決したい場面の選択など
・解決方法の選択
　習得した知識・技能の中から、どの方法が最適かを目的に応じて自ら判断・決定する場面の工夫など
・学習形態の選択
　「一人でじっくり考える」、「ペアやグループで知恵を出し合う」、「全体でアイデアを共有する」など、学びやすい形態を生徒が選択・調整できる工夫など
・学び方の選択
　自分に合った資料の選択、ICT の活用など

③ 学びを生活や社会に結びつけるための振り返り

学んだことを生活や社会の中で生かすためには、生徒自身が、自分の学びを振り返り、把握することが重要である。そこで、学習の過程や成果を自覚化し、生活での実践や新たな課題発見につなげることができるようにする。

具体的には、学び方を振り返り、「何が分かったか」だけではなく、「どのような活動（過程）を通して、それが理解できるようになったのか」などを自分の言葉で整理し、自分の伸び・成長を実感できるようにする。また、生徒が見つけた分からないことにも価値付けをすることで、生徒が自ら学んできた過程の価値付けや意味付けをし、学びの深まりを自覚化できるようにする。こうした振り返りを繰り返すことは、学びを生活に生かし、生活を工夫し創造しようとする生徒を育てることになると考える。

【振り返りの視点の例】
・学習内容について
・学習過程について
　何に着目しどのように考えたのか、どんなことに困ってどのようにして解決したのか、自分の考えを広げたり深めたりしたきっかけは、など
・自己の変容や新たな課題の発見などについて
　自己の成長に何が必要か、次にどんな課題に挑戦したいか、これからの生活に生かせることは何か、など

以上の方略に沿って、３年間を見通した計画に基づき、生徒が「学びがい」を感じる課題に対して、「自己決定」しながら取り組み、その学びの過程を「振り返る」学習を繰り返すことで、生活の営みに係る見方・考え方を定着させる。そして、生活や社会の問題を自ら解決する力を高め、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造しようとする実践的な態度を身に付けた生徒を育成しようと考える。

６　研究の成果と課題

(1) 成果

(2) 課題

７おわりに